

資料

第5回 APVS に参加して

鈴木 亨 (動物衛生研究所)

Suzuki, T. (2011). What felt through participation in 5th APVS.

Proc. Jpn. Pig Vet. Soc. 56, 26-28.

キーワード：APVS、タイ、豚

はじめに

今回はじめて、第5回 APVS (5th Asian Pig Veterinary Society Congress) に参加しました。初めはどんな雰囲気をもった学会だろうという不安もありましたが、実際に学会に参加してみると、やはり同アジアでの開催とあって、言葉こそ異なりますが、参加している人々、タイの文化や食事など共感ができるものが数多く存在し、どこか心地よく過ごすことが出来ました。最後には3日間の学会を十分満喫できたと同時に、良い刺激を受けて研究所に戻る事ができました。学会から幾分時間が経過しているため記憶も薄れがちですが、それでも印象に残ったことや学会への参加を通じて感じたことについて報告します。

第5回 APVS はタイでも有数のビーチリゾートであるパタヤ市 (バンコクの南東に位置し、車で2時間程度) で3月6日から9日までの4日間の日程で開催されました。会場は宿泊施設とコンベンションホールが一体となったリゾートホテルであったこともあり、連日朝早くから夜遅くまで密度・内容ともに充実したプログラムが構成・演出されていました。大会長は Chulalongkorn 大学 The Office of Commission on Agricultural Resource Education (「食と農」学部) に相当) の Kunavongkrit 教授であり、大会テーマは「Healthy Pig for Healthy Life」、すなわちいかに健全な豚を作出し、人々の健康に寄与するかについて外気に劣らないほどの白熱した議論や意見交換が繰り広げられました。参加者は主に日本、中国、韓国、フィリピン、ベトナム、タイなどの計23カ国の養豚産業に携わる研究機関や製薬企業等の関係者、生産者に加え、学生など総勢約850人が参加しました。6日は前夜祭が開かれ、簡単な食事、飲物に加え、スタッフおよびタイの伝統的な踊りと音楽に華やかに出迎えられました。大会初日は

タイ農林大臣の挨拶により幕開けしたオープニングセレモニーに引き続いて、最大3000人収容のコンベンションホールが埋め尽くされるほど注目度の高い Asian countries reports が行われました。日本から順に、中国、韓国、フィリピン、ベトナムと続いて最後にタイの代表者が各国の養豚産業の現状とそれらを取り巻く病気等の諸問題について報告しました。日本代表はサミットベテリナリーサービスの石川弘道先生であり、本国の養豚数、生産性が近年横ばいの状態であることや2010年4月に宮崎県で発生した口蹄疫について報告されました。次いで、目覚ましい発展が続く中国では、食肉の需要が急速に高まっているため、養豚産業もまた活性化している。それに伴い、新たな診断法やワクチン、治療薬の開発が進み一定の効果が得られている一方で、新たな病気 (複合感染) の出現・蔓延に直面している現状について報告されました。その他韓国では依然として口蹄疫が蔓延しており、封じ込め対策に追われていることやベトナムでは高病原性豚繁殖・呼吸器症候群 (PRRS) が流行しており、この原因として単一ではなく、複数の要因が関与して広がった可能性についてそれぞれ報告されました。個人的にはタイの報告によると日本のソーセージの大半がタイで製造されている事実に驚きを感じ、この場での情報共有に終わらず、国を越えて協力して安全および管理対策に力を注ぐ必要があることを改めて感じました。昼食は会期中少しでも多くの交流や議論の時間を楽しむことができるように、毎回ランチボックスが配給されました。数種類の中から好みの食事を選び、会場内外で自由に食べられるように配慮されていたため、これも本会の一つの楽しみとなっていました。初日の午後は口蹄疫をテーマとしたワークショップが用意されていました。2020年におけるアジアの清浄化達成を目指し、参加者全員がアジアの現状を理解・共有し合い、アウトブレイクが起こった国の経験や発生機序の分析から得られた知見を生かして、各国が協力し

て効果的な制御方法を模索していくよう働きかけた内容でした。ワークショップに続いては、参加者がそれぞれ得意分野あるいは興味がある分野（4会場）に分かれて、より専門的な意見交換や議論を深め合うことを目的に、口頭発表が用意されていました。対象分野はウイルス病、バクテリア／寄生虫／カビ、薬理（抗菌耐性を含む）、生産、繁殖、臨床、病理／免疫／診断、疫学の計8分野であり、2日間にわたり計73題に対して有意義な議論が繰り広げられました。さらに、初日の最後にはスポンサー企業主催のサテライトシンポジウムが用意されており、参加者はそこで軽い夕食を済ませつつ、新製品あるいは主力製品に関して勉強まで出来る演出が施されていました。これまで述べてきたように、初日だけでも朝早くから夜遅くまで非常に内容の充実した、かつ常に視点に変化を与えることでメリハリのついたプログラムが構成されていました。

2日目は朝8時15分から午前中の間は招待者によるシンポジウムが、午後は口頭発表が用意されていました。シンポジウムの内容もマイコプラズマ、PRRS、豚流行性下痢 (PED)、スピロヘータ、さらにエンドトキシンと多岐にわたる話題で構成されており、それぞれの専門家が詳細にかつ分かり易く説明して下さいま

した。また本学会では口頭発表とは別にポスター発表も用意されており、気軽にまた時間に制限なく議論ができるように計147題の演題が会場通路に所狭しと掲載されていました。内容的には生産（遺伝、運営、健康管理）と病気（繁殖障害、ウイルス、病理、免疫、診断、バクテリア／寄生虫／カビ、薬理）の2つのカテゴリーに分類されますが、ここでもまた多岐にわたる興味深い話題が豊富に用意されていました。さらに、数あるポスターの中から各カテゴリーにおいてそれぞれ独創性、理解性に優れた作品を奨励する趣向（ポスター賞）も準備されていたため、大会運営側からみれば注目度の向上、参加者側からみれば明確性、簡潔性を考慮した創作意欲への向上につながったものと思われます。自分もそうした趣向に刺激を受けたもの一人として、ポスター作成に意欲的に取り組んだ結果、見事病気カテゴリーでポスター賞を受賞することが出来ました（図1）。この場を借りて、本研究に協力して下さいました方々に心より感謝致します。3日目はシンポジウム1題とワークショップ1題の午前中で閉会することから、2日目の夜にはディナーが用意されていました。これまでに白熱した議論を重ねてきたコンベンションホールは一転して安らぎを与えるディナー会場となり、参加者は円卓を取り囲み、タイの美味しい料

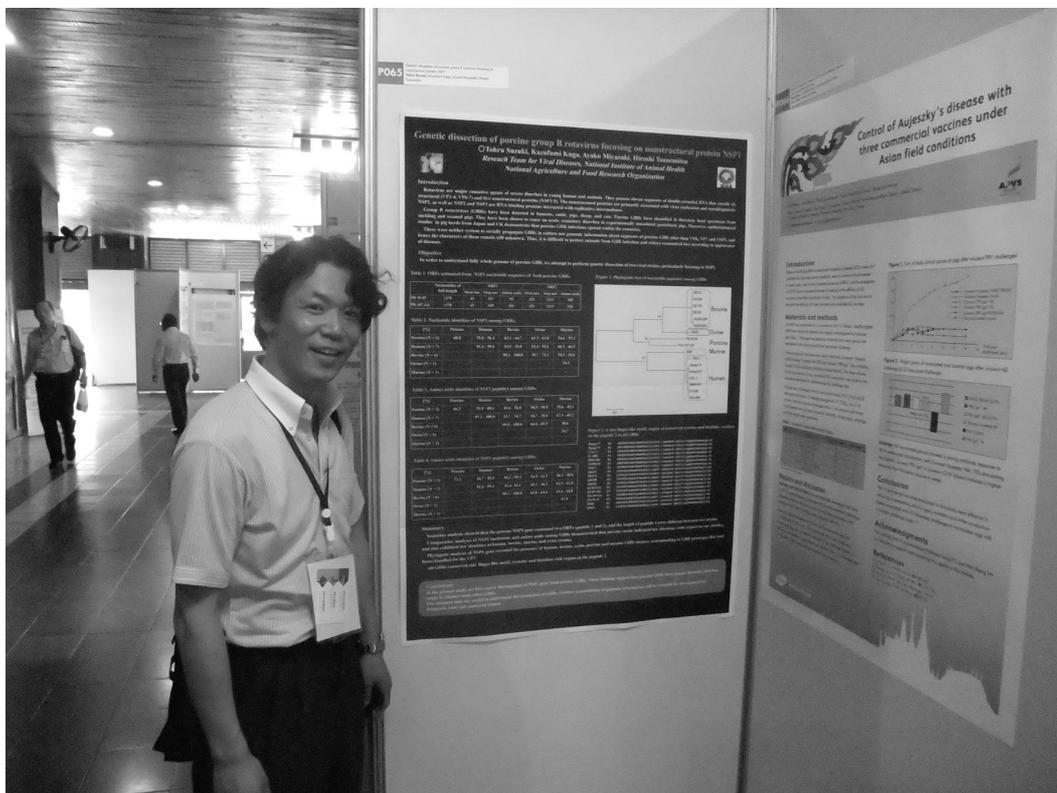


図1 APVSのポスター会場にて（筆者）

理や飲物を堪能しながら、また途中にはタイの伝統的な音楽や踊りも披露され、タイの文化に触れる機会を楽しむ貴重な時間を過ごすことが出来ました。そしてディナーも終盤に差し掛かった頃には、各国の代表者がそれぞれ自国のテーマ曲に乗って再び舞台に集結し、アジア各国の団結を確認・発信しました。ディナーは3時間程続きましたが、随所に気配りの届いた演出であったため、今思えばあつという間の一時であり、自分も含め参加者全員が心の底からその安らぎの時間を満喫したと確信しております。以上、これまで述べてきたように、本学会は学術的な意味合いはもちろんのこと、随所にタイの国民性や文化、料理に触れる機会が用意された大変心がこもった学会でありました。この場を借りて、心温まる配慮ならびにスムーズかつ刺激的な大会運営に携わった関係者の方々に心から感謝いたします。

最後に、次回の APVS (第 6 回 APVS) に関して、詳細は不明ですが、2013年にベトナムのホーチミン市で行われる予定になっております。自分のように初めて参加される方でも、本会は楽しく参加でき、また沢山の刺激を持ち帰ることが出来る会であることを確約致しますので、これを機会に多くの方々が参加されることを切に願っております。

おわりに

学会自体は多少華やかな印象はありましたが、全体を通じて随所に参加する側の視点に立って考えられた内容・構成ともに充実したバランスよい学会でした。ディナーにおける最後の演出が象徴的であったように、各国の代表者が国旗と共に舞台上がり手と手を取り合い、一つになったのは印象的でした。このように各国が知識と経験を交換・共有し合い、アジア各国が丸となって直面する養豚産業の問題に取り組むことが出来れば、本大会のテーマでもある「Healthy Pig for Healthy Life」を成し遂げる日も遠くないのではないかと痛感致しました。